

『瑜伽師地論』「声聞地」の行者観
—「縁性縁起観 *idaṃpratyayatāpratītyasamūtpāda*」を中心として—
大正大学 阿部貴子

『瑜伽師地論』「声聞地」（以下『声聞地』）は、ヨーガの体験を論理化し体系づけた初期瑜伽行派の文献といわれる。ここでは「ヨーガ行者 *yogin, yogācāra*」（いまは両者をとくに区分しない）を、ときに「仏弟子」すなわち「仏の声を聞くもの *āryaśrāvaka, tathāgataśrāvaka, buddhaśrāvaka*」と称している。そのため、本発表では学会テーマである「仏弟子」を、仏の修行法を实践する「ヨーガ行者」と見なし、『声聞地』の行者観を探ることにしたい。

さて、『声聞地』の構成の中心は、ヨーガを知る者 *yogajña* が初学者 *ādikarmika* に修行法を教える指導マニュアルの形式を取っている。このような初学者へのヨーガ指導は、禅経典—『修行道地経』『達磨多羅禅経』『坐禅三昧経』『禅秘要法経』『五門禅経要法』『梵文瑜伽書 *Yogalehrbuch*』—の骨子でもあり、これまでも『声聞地』と禅経典の構造上の近似性が指摘されてきた。

また『声聞地』と禅経典がともに重視するヨーガは、阿含経典に源流があるとされるいわゆる「五停心観」（不浄観・慈愍観・縁性縁起観・界分別観・入出息念）であり、この点でも両者の共通性が認められる〔小谷 1995、山部 2001〕。しかし、五種各々の内容を考察すると、文献間に様々な相違を見ることができるといえる。特に「縁起観／因縁観」の扱いに関しては大きな違いがある。

そこで、本発表では『声聞地』の「縁性縁起観 *idaṃpratyayatāpratītyasamūtpāda*」に焦点を当て、禅経典との比較からその特徴を挙げてみたい。

「縁性縁起観」については、さしあたり次の点が問題となろう。

一、阿含経典には「五停心観」を五種一組で挙げる経典はないが、三種や四種を一組にするものがある（*Meghiyasutta* 等）。そのなかに「縁起観／因縁観」を入れるものは見当たらない。

二、禅経典では総じて「縁起観／因縁観」を説くが、*idaṃpratyayatāpratītyasamūtpāda*（此縁性）の名称を用いるのは『声聞地』以前の成立とされる文献には見られない。この語は阿含経典ではパーリ文献のみに知られてきたが、トルファン出土本『縁経』の梵文写本（パーリ『相应部』「因縁相应」に対応）に確認できる〔齊藤 2011〕。また、馬鳴作 *Saundarananda* で修行法としてこの語を使用する点に注目すべきであろう。

三、『声聞地』の「縁性縁起観」では、『修行道地経』にある地獄回避という目的に触れず、『達磨多羅禅経』のように中有プロセスの観想を説くのではなく、『坐禅三昧経』のように『般若経』を引用するのでもない。むしろ不自然なまでにこうした所説をそぎ落とし、『縁起分別経』に依拠しつつ、『菩薩地』「真実義品」の空性理論に接近する姿勢が窺える。

以上の検証を手掛かりに、『声聞地』が「ヨーガ行者」の修行領域をどのように捉えていたのか、その一端を考察してみたい。

キーワード：五停心観、縁性縁起観、禅経典